

UD 視点 5 教師の話し方、発問や指示

学習や生活の場面で、教師の児童生徒への働きかけの大半は、「話すこと」です。しかし、人はそれぞれ話し方に何らかの癖を持っています。それが授業の中で無意識に出てしまうことで、児童生徒に話の内容が伝わりにくくなることがあります。

わかりやすく話をするポイントとして、「ゆっくり」、「短い言葉で」などが挙げられます。これらをしっかり意識し工夫することで、学級全体が「わかる」授業につながると考えられます。

できるだけ多くの肯定的メッセージを伝えていくことで、児童生徒の授業に対する意欲を高めていきましょう。

児童生徒の困っている状況 UDの視点による支援や配慮のポイント

① 児童生徒の頑張りを認め、肯定的な表現で話しかけている。

 自分の考えや思いを発表できずにいる、自分勝手な言動が見られる

 学級のすべての児童生徒の気持ちや頑張りを受け止め、安心して学習できる雰囲気をつくる必要があります。学習活動の結果だけでなく、結果に至るまでの過程を認めるなど、プラスの声がけを意識して行いましょう。

<自分の考えや思いをうまく言葉で伝えられない児童生徒に対する支援 例>

- 待つことを基本としながら、必要に応じて、教師が児童生徒の言葉を補ったり代弁したりする。
- 「Aさんの考えに、つけ足しの意見はありませんか？」などと発問し、友だちの思いを推察させて意見をつないでいく。

<落ち着きがなく、私語が多い児童生徒に対する支援 例>

- 「おしゃべりしないで。」と直接注意をするのではなく、「意見がある人は発言してみましょう。」などと肯定的な表現に言い換えた形で、学級全体に声がけする。その中で、その児童生徒自身に行動調整を促す。
- 「静かにしなさい。」と直接注意をするのではなく、「Bさんは、相手の話をよく聴いてくれるから、話しやすいよね。」などと、モデルとなる友だちの行動に注目させ、その児童生徒を含めた学級全体の気づきを促す。



② 話し始める前に、興味を引く工夫をしている。 (タイミング、立つ位置、前置きなど)

 話を聞いていない、話の内容を理解していない、積極的に活動していない

 どの児童生徒も、聞くための構えが十分にできていない状態では、話の内容がうまく頭の中に入らず、聞き落としてしまうものです。話す前に、以下の点を意識してみましょう。

<興味の引き方 例>

- 児童生徒の様子を見ながら、話し始めるタイミングを計る。
- 今行っている活動をいったん止めさせてから、話し始める。
- 注目を集めるために、指導の場面に応じて、立つ位置を変える。
- 「大事なことを言います」、「これからすることを言います」など、前置きをしてから話す。
- 表情や視線を工夫して、児童生徒への称賛や注意のメッセージを伝える。
- 配慮を要する児童生徒には、言葉だけでなく身ぶりなどをつけながら話す。



③ 全体への発問や指示、個別の声がけや確認などの支援の仕方を工夫している。

 発問を理解していない、指示と違う活動をしている、十分に力を発揮できないでいる

 児童生徒の「学び」は一人一人異なります。また、授業中に抱く「思い」も違ってきます。そうした児童生徒の特徴をつかんだ上で、全体への発問や指示を行い、適宜個別の声がけや確認を取り入れていく必要があります。

一人一人に対する声がけや確認は、学級のすべての児童生徒に対して、安心感を与える支援になります。

<全体への発問や指示、発言の取り上げ方 例>

■発問、指示、説明をバランスよく、効果的に組み合わせ、考えを広めたり深めたりする。

- | | |
|------------------|---------------------------|
| ・発問に偏った授業の問題点 | → 考える時間を確保する分、授業がなかなか進まない |
| | → 一部の答えられる児童生徒だけで授業が進む |
| ・指示や説明に偏った授業の問題点 | → 受け身になりがち、集中力が続かない |

■児童生徒が発表した後、「今の意見についてどう思いましたか。」などと投げかけ、友だちの発表に対して傾聴する習慣を育てる。意図的な指名などにより、一部の児童生徒だけではなく、多様な考えを引き出せるようにする。

<全体と個別の支援の組み合わせ方 例>

■問題を提示した後、必要に応じて机間指導を行う。個別に声がけしながら理解の状況を確認し、必要な支援をする。

■大勢の前では緊張してしまう児童生徒に対しては、「ここはいい考えだね。」などと声がけし、自信を持たせて発表を促す。

■今、どこをどのように学習したらよいかわかっていない児童生徒に対しては、「ここをこんなふうに考えてみよう。」などと声がけし、学習への意欲を喚起する。



④ 児童生徒にわかりやすい発問や指示になるように工夫している。

 発問や指示をよく理解していない、学習活動に取り組めない、十分に力を発揮できないでいる

 発問や指示は、一文が長いと内容が伝わりにくく、どの児童生徒にとっても、混乱の要因となります。発達段階に応じて、できるだけ簡潔で、具体的な表現を用いた発問や指示を行うことが、「わかる」授業につながります。

<わかりやすい発問や指示 例>

■一文で一つの動作ができる指示をする。

「問題集を出しなさい。30ページを開きましょう。10時までには書きましょう（時計に注目させる）。始めなさい。」

■抽象的な表現ではなく、具体的な表現で指示する。

- ・「しっかりできましたか。」→「特に、～の点はできましたか。」
- ・「ちゃんと座りましょう。」→「椅子に深く腰をかけて座りましょう。」
- ・「ここを見てきてください。」
→「この文章が間違っていたら書き直してきてください。」

